

推 薦 書

ふ り が な 氏 名 (年 齢)	なかとう よしひさ 中藤 良久 (61 歳)
現 職 (前 職)	九州工業大学 理事（研究、産学連携、経営戦略担当） ()
推 薦 理 由	中藤良久理事は、これまで九工大の研究力強化と社会実装に向けた取り組みを強力に推進してられました。特に、地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）の採択において、卓越したリーダーシップを発揮されました。また、研究センターを中心に組織的取り組みを展開により外部資金の大幅増額を達成し、九工大の地位向上に大きく寄与しています。一方、教育では九工大の掲げるグローバル・エンジニア教育（GCE 教育）に新たなアントレ教育を取り入れることで学生のデザイン力の向上を図りつつ、6年一貫アントレ教育設計のもと学生のチャレンジへの志向性涵養に努めてられました。急速な少子化が進む中、九工大が地域の中核大学として未来社会に貢献し、高度なグローバル・エンジニア養成にとって唯一無二の大学との国内外の評価を確立するため、中藤良久理事を次期学長に最適な候補として推薦いたします。

国立大学法人九州工業大学学長選考・監察会議議長 殿

九州工業大学学長候補適任者として、上記の者を推薦します。

2025年 6月 19日

推薦人（代表） 水井 万里子

所属（職名）理事（教育、学生担当）

氏名（自署）水井 万里子



（注1）年齢は、2025年5月1日現在の年齢を記載してください。（以下の各様式において同じ。）

（注2）現職がない場合は、同欄の（ ）内に直近の前職を記載してください。（以下の各様式において同じ。）

（注3）この推薦書と併せて、別紙様式第5号を提出してください。

（注4）この推薦書は、公表の対象となります。

（注5）推薦人が推薦できる学長候補適任者は、1人に限ります。

（注6）学長候補適任者の推薦に当たり、自薦は認めません。

学 長 候 補 者 略 歴 書

氏 名	中 藤 良 久	
年 齢	6 1 歳	
年 月	学 歴	
1986 年 3 月	信州大学工学部電子工学科卒業	
1989 年 4 月	信州大学大学院工学研究科電子工学専攻 博士前期課程入学	
1991 年 3 月	同 修了	
1998 年 4 月	信州大学大学院工学研究科システム開発 工学専攻博士後期課程入学（社会人）	
2001 年 3 月	同 単位取得退学	
年 月	学 位	* 写真は、上半身脱帽、正面向きで3ヶ月以内に撮影したもの（横7cm×縦9.5cm）を、枠内に貼ってください。
1991 年 3 月	工学修士（信州大学）	
2007 年 3 月	工学博士（信州大学）	
年 月	主 な 職 歴	
1986 年 4 月	シャープ株式会社 IC 事業本部（～1989 年 3 月）	
1991 年 4 月	松下電器産業株式会社音響研究所（～2010 年 9 月）	
2010 年 10 月	九州工業大学大学院工学研究院電気電子工学研究系 教授	
2013 年 9 月	独立行政法人産業技術総合研究所、客員研究員（～2024 年 3 月）	
2017 年 4 月	九州工業大学 大学院工学研究院、工学研究院電気電子工学研究系長	
2017 年 4 月	九州工業大学 工学部 電気電子工学科長	
2018 年 4 月	九州工業大学 I o T システム基盤研究センター センター長（併任）	
2020 年 4 月	九州工業大学 教育高度化推進機構学習教育センター 副センター長（併任）	
2020 年 4 月	九州工業大学 工学研究院 副研究院長（併任）	
2021 年 4 月	九州工業大学 副理事（新規事業担当）（併任）	
2023 年 4 月	九州工業大学 理事・副学長（研究、産学連携、経営戦略担当）（併任）	
年 月	教育・研究及び職務に関する主な業績	
	主に AI や IoT を利用した福祉システムに関する教育と研究に従事し、企業との技術コンサルタントや共同研究を積極的に行いながら、人が活動する際の様々な課題を機械を活用することで解決するヒューマン・インタラクション分野での研究を推進し、本分野の発展と人材育成に貢献してきた。その間、科学研究費補助金基盤研究(C)としては、研究代表者として「高齢者音声を明瞭化する音声処理インタフェースに関する研究」基盤研究(C)（2011 年度～2013 年度）など、これまで8件の科学	

	研究費補助金による研究プロジェクトに参加してきた。 以上、研究業績としては、企業技術者から大学へ研究者と転身して以来、2010 年 10 月～2025 年 4 月までの約 15 年間で 84 編の SCOPUS 論文を執筆し、学術雑誌や国際会議録として掲載された。下記に最近発表したものを中心に業績を示す。 【論文】SCOPUS 掲載論文のみ
2024 年 1 月	Sasaki, H., Uchida, H., Li, Y., Nakatoh, Y., "Power Harassment Judgement Method Based on Emotion Analysis Using Natural Language Processing", International Journal of Integrated Engineering, 2024, 16(7), pp. 49-58
2024 年 11 月	Hamasaki, T., Kawabata, J., Uchida, H., Li, Y., Nakatoh, Y., "Robustness of Biometric Authentication Method Using Image of External Auditory Canal", Gcce 2024 2024 IEEE 13th Global Conference on Consumer Electronics, 2024, pp. 604-605
2024 年 1 月	Uchida, H., Li, Y., Nakatoh, Y., Tominaga, K., Itai, H., "Improving log anomaly detection via spatial pooling: Combining SPClassifier with ensemble method", Cognitive Robotics, 2024, 4, pp. 217-227
2023 年 9 月	Li, Y., Zheng, Y., Lu, H., Kamiya, T., Nakatoh, Y., Serikawa, S., Yin, Z., "Pose Estimation of Point Sets Using Residual MLP in Intelligent Transportation Infrastructure", IEEE Transactions on Intelligent Transportation Systems, 2023, 24(11), pp. 13359-13369
2023 年 11 月	Teng, Y., Gao, P., Lu, H., Li, Y., Kamiya, T., Nakatoh, Y., Serikawa, S., "Multidimensional Deformable Object Manipulation Based on DN-Transporter Networks", IEEE Transactions on Intelligent Transportation Systems, 2023, 24(4), pp. 4532-4540
2023 年 7 月	Nagasawa, K., Ishiyama, S., Lu, H., Kamiya, T., Nakatoh, Y., Serikawa, S., Li, Y., "Squeeze-and-Excitation Block Based Mask R-CNN for Object Instance Segmentation", Communications in Computer and Information Science, 2023, 1732 CCIS, pp. 56-64
2022 年 11 月	Nishikawa, K., Akihiro, K., Hirakawa, R., Kawano, H., Nakatoh, Y., "Machine learning model for discrimination of mild dementia patients using acoustic features ", Cognitive Robotics, 2022, 2, pp. 21-29
2022 年 11 月	Kuwahara, A., Nishikawa, K., Hirakawa, R., Kawano, H., Nakatoh, Y., "Eye fatigue estimation using blink detection based on Eye Aspect Ratio Mapping(EARM)", Cognitive Robotics, 2022, 2, pp. 50-59
	【職務に関する業績】 研究面では、九工大の IoT 技術に関連した研究者を結集し、IoT システム基盤研究センターを自ら立上げ（2018 年 4 月設立）、通信や物流などの具体的な社会課題に対して IoT 技術を用いて解決を図る取り組みを推進し、大型の外部資金の引き込みや寄付講座の設立へと繋がった。特に、パナソニックとの共同研究講座を自ら立ち上げ、事業化へと繋がっている。 教育面では、アントレプレナーシップ教育にいち早く取り組み、九工大の掲げるグ

	ローバル・エンジニア教育（GCE 教育）に新たなアントレ教育を取り入れることで学生のデザイン力の向上を図りつつ、6 年一貫アントレ教育設計のもと学生のチャレンジへの志向性涵養に努めた。 管理面では、2018 年度からは理事・副学長（研究・社会連携担当）として、研究・産学連携活動の活性化に取り組み、大型の外部資金の獲得や共同研究講座の契約締結を推進した。中でも地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS、5 年 55 億円）は、国立大学の将来を左右する大型予算事業であり、その企画・提案を主導した。また、研究センターを中心に外部資金獲得に向けて組織的に取り組むなど、積極的に外部資金を獲得する取り組みを展開した結果、大幅な増額を達成し、九工大の地位向上に大きく寄与した。
年 月	主な社会貢献活動、教育・研究及び職務に関する主な受賞歴
	【国、地方公共団体等の委員】 2022 年 4 月 (公財) 福岡県産業・科学技術振興財団 評議員 2022 年 4 月 (公財) 北九州産業学術推進機構 理事 2022 年 6 月 (公財) YMFG 地域企業助成基金 理事 2022 年 4 月 福岡県風力発電産業振興会議 副会長 2022 年 6 月 福岡県半導体・デジタル産業振興会議 副会長 2022 年 7 月 九州イノベーション創出戦略会議 (KICC) 副会長 2024 年 9 月 ものづくり日本大賞九州地域選考分科会 委員 【学会・協会】 2002 年 4 月 (財) 日本規格協会 バイオメトリックス標準化調査研究委員会 (～2004 年 3 月) 2002 年 4 月 (社) 情報処理学会 音声言語処理研究会 (～2004 年 3 月) 2003 年 4 月 (社) 電子情報技術産業協会 (JEITA) 音声入出力方式標準化委員会 2005 年 4 月 (財) 大阪科学技術センター 五感産業研究会 (～2010 年 3 月) 2009 年 4 月 (社) 電子情報通信学会 会誌編集委員会 (～2012 年 3 月) 2016 年 3 月 (社) 日本音響学会 音バリアフリー調査研究員会 2017 年 1 月 JIS 原案作成委員会 2018 年 1 月 ISO/IEC JTC 1/SC 35/WG6 委員会 2020 年 10 月 IEEE CTSoc ENT technical stream committees 【受賞歴】 2015 年 Best Paper Award 「The Institute of Industrial Applications Engineers」 2019 年 Best Student Poster Award 「The 7th IIAE International Conference on Intelligent Systems and Image Processing 2019」 2022 年 International Best Researcher Award 「International Society for Scientific Network (ISSN)」

(注 1) この学長候補者略歴書は、公表の対象となります。

(注 2) 記載にあたっては、別紙様式 2 号の 1 の記載内容のうちから、主要なものを記載してください。

(注 3) 本様式への記載にあたっては、10.5 ポイント以上のフォントを使用してください。

所 信 表 明 書

学長候補者の 職・氏名	現職：九州工業大学 理事・副学長 (前職：)	ふりがな なかとう よしひさ 氏名： 中藤 良久 (自署) 中藤 良久 
(所信) 目指す大学像：「自由闊達な組織風土」「チャレンジし続ける大学」		
このたびは学長候補にご推薦頂きましたこと、身に余る光栄であります。以下におきまして、所信を述べさせていただきます。 【全体ビジョン】 本学は、「技術に堪能なる士君子の養成」の開学の精神のもと、教育・研究で培った知の公開と価値創造ともの創りを推進することで、産業界の競争力強化ならびに地域の活力向上に貢献してきました。しかし、今や国境の壁を超えて人・モノ・アイデアが自由に行き来する中で、技術革新のスピードはすさまじく、社会生活に大きな変革をもたらしています。一方、深刻な少子化による人口減少社会が始まっており、このような大変革の時代の中で地方国立大学として如何に生き残るか、その方策を真剣に考える必要があります。 私は、開学の精神を踏まえつつ本学が未来へと大きく進化していくためには、本学の持つ最先端の技術と人材で世界にインパクトを与えるイノベーション創出大学になることが本学の目指す姿であると考え、それを実現するために以下の教育・研究・社会貢献において、全学を挙げて推進する体制を整備・構築します。 ●教育 グローバルに活躍できる社会実装の担い手として、学部学生から博士学生までを育成するとともに、社会人教育にも積極的に取り組み、我が国や地域の産業・経済の活性化に貢献できる、かけがえない人材を送り出す。 ●研究 ディープテックシーズを社会実装可能な技術に昇華させるための仕組みを整備し、九工大をハブに学術界から創出される革新的な技術を産業界にシームレスに社会実装していくイノベーション創出大学モデルを確立する。 ●社会貢献 未来を思考するモノづくりとひとづくりから生まれる新たな価値の社会実装を推し進め、かけがえない人材の輩出により、国や地域へのインパクトと存在価値を高め、地方の国立大学法人の持続的成長モデルとなる。 以上を全学が一丸となって推進するためには、学生・教職員の誰もが自由闊達に意見やアイデアを言える風土の醸成と、学生・教職員の誰もが失敗を恐れずチャレンジできる環境を整備することが必要です。その結果、学生が本学で勉学したことを誇りに思い、教職員が本学で働くことに満足感を覚え、さらには地域や国も含めたすべてのステークホルダが、本学がかけがえない大学であると認めていただけるよう、全力を尽くす所存です。以下、具体的な考え方や方策を掲げます。		

【教育について】

現代のような変化の激しい社会では、極めた専門分野に加えて異なる分野の知識や実践的な能力やスキルを伸ばすことが強みになります。自分の専門分野以外の領域の知識やスキルを磨くことのできるカリキュラムの充実を図りたい。また、ボーダレスな現代ではグローバルな視野を持つことは必須であり、国内外の提携校との連携を進め、多くの学生がグローバルな環境に身をおけるようなプログラムの整備に努めます。さらに本学の卒業生や近隣企業などに対して学び直しの場を提供することは地域の中核大学として重要な役割であり、様々なコネクションを利用して学びの機会の拡大に努めます。

【研究について】

研究者が自由な発想に基づく多様な研究を継続して進められる時間や予算を確保できるような環境の構築に努めたい。また、研究力強化には、学内外の研究者が自由に対話することで、様々なアイデアを共有しながら研究を進められる環境や仕掛けが重要と考えます。研究センターなどを核とした学内連携、国際連携などの様々な形態の連携を促進します。一方、研究の初期段階でも知的財産の獲得は重要と考えます。知的財産を武器に共同研究や連携の引き込みができるような良循環を作ること、研究に見合った資金の確保につなげたい。

【社会貢献について】

社会実装の支援人材を学内外から集積し、研究者の持つシーズや学生の持つアイデアをスタートアップなど社会実装に繋げるための取り組みを加速化します。社会実装に必要な要素（POC、実証実験、明細書作成など）を支援人材が行うことで、研究者が研究に集中できるような環境を構築します。一方、自治体や地域企業との連携を図ることで、人材交流を促進し、大学が保有する機器・設備のオープンファシリティ化などを積極的に進めることで、新産業の創出や地域産業の活性化に対して地域の中核的な役割を果たしていきます。

【組織運営について】

スピード感のある組織運営を実現するため本部制の良い部分を踏襲しつつ、本部間の垣根を低くして教職員が自由闊達に意見やアイデアを言える風土を醸成し、安心して働ける環境・制度の整備を行いたい。特に、若手教職員や学生の意見を経営に取り入れることも前向きに進めたい。一方、安定的な財務基盤の構築のためにも、社会実装で得た資金を次の教育や研究に好循環させる仕組みを確立するとともに、DX・業務標準化の推進と多元的な収入の確保に努めます。

（注1）この所信表明書は、公表の対象となります。

（注2）所信欄は、九州工業大学の将来構想、教育・研究・社会貢献・国際貢献、大学運営等に関し、2,000字程度以内で記載してください。

推薦人名簿

ふりがな 氏 名 (自署)	所 属・職 名	押印欄
推薦人代表	水井 万里子	敬養教育院 理事・副学長 
芹川 聖一	工学研究院・教授	
福本 幸弘	イノベーション本部・ 副学長 特任教授 本部長	
神谷 亨	国際戦略室 研究本部 副学長・教授	
坂本 寛	情報工学研究部・教授 学長特別補佐	
玉川 雅章	生命体工学研究科 副 研究科長・教授	
宮野 英次	情報工学研究院・教授	
池永 全志	IoTネットワークイノベーション実証研究センター センター長・教授	
石井 和男	未来社会ロボット実装センター センター長・教授	
齋藤 剛史	データサイエンス・AI研究センター センター長・教授	

(注) この推薦人名簿は、公表の対象となります。